

奈良 勲(シリーズ監修)  
吉尾雅春, 高橋哲也(編)

## 《標準理学療法学 専門分野》 内部障害理学療法学

評者 古川順光  
(首都大学東京健康福祉学部理学療学科)



本書は、吉尾雅春氏、高橋哲也氏が満を持して発刊に至った、現時点における内部障害理学療法学の集大成とも言える書である。編者らが「序」において述べているように、内部障害の理学療法には「華々しい手技やテクニックが存在しない」。故に、いかにすれば患者の「症状の正しい観察」が的確にできるのか、治療につなげられるのかを、われわれ理学療法士(および学生)に真正面から問いかけている書となっていると言えるであろう。

本書の内容をみていくと、第1部の序論で、まず内部障害とは何か、その定義づけや歴史、内部障害者の動向などについて、わが国で唯一国立大学で内部障害分野の講座をもつ、東北大学の上月正博教授が詳しく述べておられる。

続く第2部、第3部では、それぞれ循環器障害・呼吸器障害の理学療法について、解剖・生理の基礎的な事項から、心電図や身体所見のとり方、運動負荷試験に至るまで、患者の症状の把握をいかに行うかが示されるとともに、回復期運動療法や虚血性心疾患・心不全などの循環器障害の代表的な運動療法について、評価と治療、予後やリスク管理に至るまで明快に述べられている。また、昨今理学療法の対象として取り上げられることの多くなった COPD(chronic obstructive pulmonary disease)についても、入院から在宅に至るまでの流れをつかむことができ、嚥下障害へのアプローチにも触れられている。さらに、無気肺や外科手術後の理学療法にまで論が展開されている。

最後の第4部では代謝疾患の理学療法について、糖尿病や腎障害、メタボリックシンドロームまで、理学

療法のみでなく病態に関しても詳細に述べられている。

これまで概観してきた通り、本書はある疾患に特化した理学療法、あるいは特定のテクニックについて述べられた書ではない。呼吸器疾患理学療法学、循環器疾患理学療法学など、いずれかの疾患について述べられた書はこれまでも散見される。しかし、本書のように「内部障害」「理学療法」を1冊の書で網羅したものは、初めてではないであろうか。ここに謙虚かつ誠実な編著者の姿勢がみられるのではないだろうか。養成校の学生や経験の浅い理学療法士は、運動器ばかりに目がいくことが多い。しかし、その運動器を効果的に使用し、患者の ADL や QOL の向上を達成するためには、本書で取り上げられている循環器系、呼吸器系、代謝機能がより正常に、かつ運動器と連結して機能する必要がある。いずれか一方でも機能低下・機能障害があった場合、果たしてその患者の生活はよりよいものになるのだろうか。編者らが本書を1冊にまとめ上げたことの意義はここにあるものと考えられる。

最後になるが、これまで述べた通り、本書は多くの項目を取り扱いつつ、過不足ない内容で構成されている。現在、理学療法学を学んでいる学生にとっても、臨床で実際に患者の治療に携わっている現役の理学療法士にとっても、患者の「症状の正しい観察」を常にすることを教えてくれる最良の書と言える。

●B5・392頁・4色刷  
定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)  
2013 年 医学書院刊